

令和4年度学内版 GP 成果報告書

取組名称	文系学生の苦手意識が強い数学を多用する科目での学習支援	
実施組織	経法学部応用経済学科	
※連携する他学部・機関がある場合は記入		
取組責任者(所属)	広瀬 純夫 (経法学部)	
取組の目標	応用経済学科が目指す人材育成を実現するためには、初年次教育で、数学への苦手意識を払拭すること。	
1. 目標達成のために行った活動と、その成果 ※活動、成果ごとに番号を付けて箇条書きで記載する。 ※成果の詳細は必要に応じて別添としてもよい。	<p>【活動】 授業期間中の毎週金曜日の昼休み(12:15~13:15)に、チューターセッションを実施した。学部3,4年生と、大学院生のチューターが、学習相談に応じることに加え、授業中に提示された練習問題の解説などを行った。毎回、30~40名の参加者があり、個別の相談も少なくなかった。チューターは、希望する学生の中から大学院生及びこれらの科目の成績上位の学部生を選考している。</p> <p>【成果】 主要な対象科目である経済数学A・Bでは、この取組みを始める前の2020年度と比べ、小テストの平均点が7.7ポイント上昇、単位取得率が2.5%上昇、毎週の小テストを途中で放棄してしまった不合格者割合が2.6%減少という成果を得られた。</p> <p>また、学生チューターにとっては、教えることを通じた自らの理解度の確認に役立ったとの声を得られた。たとえば、「他のチューターの質問への対応で、自分とは違う解答法を知ることもあり、毎回のチューターセッションが確認と納得の繰り返しだった」や「自分が考えもしなかった疑問や考え方に触れて知見が広がり、研究を進めるうえでも良い方向に作用した」などの声が寄せられた。さらに、「小テストや練習問題を解くことが、回を重ねるごとに受講生側の理解度の向上や定着につながっていると感じた」とチューター学生が述べるなど、受講生の理解度向上に、着実に役立っている手応えを得られた。</p>	
2. 目標達成度に関わる自己評価、理由、今後の展望 ※a-eから該当するものを選び、その理由と今後の展望を記述	<p>【自己評価】 「取組の目標を達成できた。」について</p> <p>b: そう思う。</p>	<p>(自己評価の理由) 上記【成果】の通り、数学的扱いへの、受講生の理解度向上に、大きく貢献したと評価できる。一方で、単位を取得できていない高年次生は、本来、こうした学習サポートの手を差し伸べるべきだが、参加するように誘導できていない。成績不振学生へのサポートについては、今後、別途、方策を検討する方針である。</p> <p>(今後の展望) 2023年度は、学部予算によって、取組みを継続する。 2022年度は、学内版GPの趣旨に沿って、1年次科目を対象に行ってきたが、2023年は、2年次以上の専門科目で、サポートが必要な科目へ、拡大して実施する。また、</p>

		<p>SPARC への対応として、データサイエンス関連の科目を充実させることから、授業中の指導補助員としても、学生チューターを活用する予定である。</p>
--	--	---